

K2・バルトロ氷河トレッキング

成田を発ち、パキスタンに着いて数日は今からトレッキングが始まるのだという実感がわかなかった。実感がわいたのは、スカルドに向かう飛行機の窓から、カラコロムの尖鋭な山々を見たとき。スカルドに着くと、終始、スケールの大きさに圧倒されっぱなしで、ここでは何でもない裏山を見て騒いでいた。まだ、本題のトレッキングは始まっていなかったが、K2 モーターでの滞在も素晴らしく、テラスから眺めるインダス川、そしてカラコロムの山々はいつまで見ても見飽きることはなかった。

アスコレーまでの道のりは、非常に鮮烈な記憶として残っている。道無き道を行くジープの乗り心地は、まるでロデオをしているようだった。

8月24日、朝起きると、“**Good morning.**”と言ってスタッフが紅茶を入れてくれ、洗面用の水も持ってきた。当たり前ではあるが、朝食も出てくるし、テントは撤収しないでいいし、パッキングもただ詰めるだけだった。これまでのテント泊とのギャップに首をかしげながら出発の準備をした。

1時間ほど歩いたところで、かなり危険な断崖をトラバースする。トレッキング開始早々、バルトロの険しさに手厚い洗礼を受けた。ここから先のルートが思いやられたが、あれほどきわどい場所は最初で最後だった。ゴンドコロ・ラ越えをしないメンバーにとってはここが核心だったかもしれない。

パイユまでの3日間は比較的歩きやすい道が続き、特にきつい思いをするわけでもなく写真撮影に専念した。道中は古びた吊り橋を通ったり、見慣れぬトカゲに遭遇したり、綺麗な石を見つけたりと、歩くこと以外にもいろいろと楽しいことがあった。

パイユでの滞在も貴重な体験だった。皆、ここぞとばかりに洗濯をすると、そのあとは思い思いに過ごした。日記を書いたり、読書をする者もいれば、ヤギを解体したり、川で魚を獲ったり、プーポーを生け捕りにしてみたり、そんなスタッフと先輩もいた。僕は柿原先輩とパイユの裏山に登った。標高にして200mほど上がる。息を切らして高いところへ登り、そこから見る景色は何物にも代え難い。鋭利な頂をした山々はどこまでも連なり、ずっと下のほうには色とりどりのテントやトイレ群が小さく見えた。あのとき先輩と作ったケルンは今でも残っているだろうか。

パイユでの滞在を終えて再び歩き始めると、程なくバルトロ氷河の舌端に至る。「あれがバルトロ氷河か…。」氷河の下から轟音を立てて泥水が流れ出る。ビアフォ川の源流である。ここで川が途切れているので辛うじて氷河の存在を認識することができたが、僕らが目にした氷河はモレーンに覆われた氷河、つまりガレ場にすぎなかった。

氷河上を進むと、グレートトランゴやトランゴタワー、ネームレスタワーなどが見え始める。それらはまさに「タワー」だった。特にネームレスタワーは、その形もさることながら、そのネーミングに心奪われた。“**Nameless Tower**”・・・その山塊に相応しい名前だと思った。

乾ききった空気の中、延々と続くガレ場を一行は飽きることなく歩き続ける。自分も同じではあるが、よほどの物好きだなと思う。トレッキングが始まってからは、歩く・食べる・寝る の3つをひたすら繰り返している。

バルトロ氷河はモレーンばかりと思ったが、次第にさまざまな表情を見せるようになった。ガレ場に突如広がるお花畑、少し憧れた真っ白な氷河（ルンゲ氷河）、何故か色が違う緑色の氷河湖と茶色の氷河湖、写真撮影 NG の軍施設……。

ガイド3人とスタッフとの交流も実に興味深かった。専ら、山と食べ物の話ばかりであるが、いくつかウルドゥ語も覚えた。と言っても、シュークリア、ビスメッタ、マゼダールタ……これぐらいか？今回のトレッキングでは日本語と英語が使えれば何も不自由は無かったのだが、せつかくパキスタンに来たのだから、あらかじめウルドゥ語を勉強してくるべきだったと思った。僕らが全くウルドゥ語を話せないのに対し、日本語をあまりに流暢に話す現地ガイド二人には脱帽だった。

8月30日、ブロードピークが見えてきた。それは確かに“Broad”なピークだった。ブロードピークが見えると、K2に近づいていることを実感できた。

この日はゴレ2での幕営となる。日中は刺さるような日射が容赦なく照りつけているが、周りの山が高いので思いのほか早く日没を迎える。一旦太陽が山に隠れると、この乾ききった空気は急速に、それこそ分刻みで冷え始め、今度は寒気が刺さるようになる。8月とは言え、日没後は富士山頂を越える標高ではやはり寒かった。しかも、足下は氷である。就寝時はレインウェアを含め、持ってきた衣類を全て着込んでシュラフに入り、さらにザックに足を入れて眠った。

朝を迎えるとテントの内側は凍り付いていた。こんな寒い朝でもスタッフは欠かさずに熱い紅茶を持ってきてくれる。冷えた体に熱い紅茶が染み渡ると、それまで緩慢だった動きが次第に機敏になる。OBの方が冬用シュラフを畳み、エアマットの空気を抜く横で、僕は、夏用シュラフを二つ畳み、薄っぺらいマットを折り畳む……。

この日、いよいよK2とご対面となる。朝冷えの中、凍結したガレ場をいつものように歩き始める。天気は快晴。上空にはエア・サファリのヘリが何往復もしている。

クリスタルタワー、ニュークリスタルタワー、マーブルピークが見える。クリスタルタワーとニュークリスタルタワーの頂上には水晶があるという。では、マーブルピークの頂上には何が？きっとマーブルチョコだろう、と現役3人は口を合わせる。「マーブル」ときたら「チョコ」しかないらしい。

K2が姿を現したのはコンコルディアの直前だった。程なくコンコルディアに到着した。メンバーから喜びの声がこぼれる。ここまで100kmほど歩いたのだろうか。全員無事にたどり着けたことが何よりも嬉しい。

目の前にはあのK2が悠然と聳えている。ここからK2まで、遮るものは何もない。…あまりにも巨大なその山塊は、陽光を受けて眩しいほどに光り輝き、天にも届かん勢いで紺碧の空に突き刺さっていた。

残念ながらあの感覚は言葉にはできない。しかし、そこに行った者にとって言葉は要らないだろう。心を打たれたとでも言うべきだろうか、K2に限ったことではないが、自分の五感で感じたことは決して色褪せることはない。今回のトレッキングで自分が受けた刺激も、これから先ずっと自分の中にあり続けると思う。

自分は危うく、「井の中の蛙」になるところだった。海外の山を知ることができたなどとは言えないが、少なくとも海外に目を向けることを知った。そして、自分はパキスタンで一生忘れ得ぬ経験をすることができた。それは自分一人では実現しなかったことである。この機会を下さったOBの方々、支えてくれた先輩方に感謝したい。

荒木 直人